

## 完了報告書（平成 22 年度）

提出者 上野 大樹

提出年月日 2011 年 3 月 29 日

### 【プロジェクト名】

和文 戦後日本における再帰的近代化と親密圏の構造変容—家族と恋愛をめぐる言説空間の実証研究と社会的モダニティ理論の再検討に向けて

英文 Reflexive Modernization and Transformation of the Intimate Spheres in Post-War Japan

### 【メンバー構成】

研究代表者 上野大樹

幹事

メンバー 平田知久、西川純司、(百木漠)、中野智仁、石川由美子

### 【ねらいと目的】 (600 字程度)

本研究は、申請者が研究業績① [『再帰的近代における親密圏の変容と個人の「代替不可能性」』、慶應義塾大学湘南藤沢学会] で暫定的に提示した研究仮説に基づき、戦後日本の親密圏の変容を実証的に明らかにすること、並びに実証研究の成果に基づいて近代社会の一般理論としての再帰的近代化論の妥当性を検証し、その理論拡張を図ることを目的とする。業績①で、ギデンズらが提起する再帰的近代化論を、その全著作を網羅して、批判的に吟味・検討した。この考察をベースにしながら、第二に、戦後日本の親密性言説を分析し、「恋愛の自由化」に再帰的近代化の全般的趨勢を読みとると同時に、ギデンズの理論では十分に説明のできない再帰化への抵抗（「恋愛と結婚の分化」と「再帰化からの家族の隔離」）、個人の代替不可能性への希求もまた併存していることを見出した。とはいえ、そこでの言説分析は探索的に仮説提示を行うためのものにとどまり、実証性確保のためには、より明確な方法論に依拠した大量のテキスト分析が欠かせない。本研究では、I. 慶應義塾大学 SFC 大学院に今年度設置された「現代社会文化論プロジェクト」とのコラボレーションにより、SFC が開発したソシオセマンティクスの方法を参照しながら、この作業を進めていく。また、II. 上の I で得られた実証の成果を再帰的近代化論の検証に回帰させる形で、理論研究への寄与を目指す。さらに、III. (1) 既存の統計・社会調査の家族研究の成果によって言説分析の前提を与え、(2) 欧米（特にイギリス）と日本の親密圏の現状の異同を再帰的近代のヴァリエントとして捉えることにより、PACS 等の家族政策の日本の導入の是非について、政策的な含意を提起したいと考えている。

### 【活動の記録】 <<研究会>>

(1) 2010 年 7 月 5-6 日 @慶応 SFC、研究業績①に関する合評会と今後の研究計画をめぐる討議、上野他。(2) 8 月 9-10 日 @京大東京オフィス、『サブカルチャー神話解体』輪読報告第 1 回、石川。(3) 10 月 24 日 @慶応 SFC、同第二回、上野。研究報告、石川。(4) 10 月 24 日 @東京オフィス。(5) 11 月 7 日 @東京オフィス、『ポスト戦後社会』輪読報告、中野・上野。(6) 11 月 22 日 @東京オフィス、『純潔の近代』書評報告、上野。研究報告、中野。(7) 12 月 18 日 @東京オフィス、野田論文・山田論文他の検討会、上野。(8) 12 月 23 日 @京大人環棟 333 会議室、現代の労働意識と親密圏／公共圏の再編成第 1 回「日本におけるワークショップの実現可能性について」、古野・百木。(9) 2011 年 1 月 15 日 @人環棟 433 会議室、同第 2 回「仕事における自己実現主義の高まりと親密圏の変容」、百木。(10) 2 月 21 日 @人環棟 333 会議室、同第 3 回。<<講演会>>(1) 1 月 17 日、施光恒先生講演会、京都。(2) 3 月 9 日、吉見俊哉先生（慶応 SFC 共催）、東京。

**【成果の概要】**（800 字程度）

京都で3回、東京で7回の計10回の研究会を開催した。また、計3回の講演会・シンポジウムを開催した。(I)については、まず我々がソシオセマンティクスとはどのような方法論なのかを理解するところから始める必要があり、慶応大学から本ユニットに参加してもらった中野氏に説明をお願いした。その上で、この手法の適用可能性と限界をめぐって、研究業績①での分析などを素材に具体的に議論した。言語分析・言説分析を専門とする中野氏と我々の家族社会学的分析とを（単なる分業ではなく）つぎ合わせ相互に学び合うことで、内在的・批判的な検討を積み重ねることを目指した(中野論文は学術論文として『SFCジャーナル』に投稿のためワーキングペーパーとしての最終成果報告書への掲載は見合わせた)。またその過程で、(II)に関わるが、狭義の家族社会学の領域を超えて「戦後日本社会論」の文脈から親密圏の変容を把握するため、この分野でのいくつかの重要文献を輪読した。その成果（レジュメなど）は、近く完成予定の現代社会文化論プロジェクトのウェブサイトで公開する。(II)に関しては、(III)と連動する形で、親密圏の構造変容が公共性の新しい形態を生み出すという再帰的近代化論の命題を当初中心に据えていたが、理論研究班での定例研究会からも示唆を受ける形で、その前提にある市民的公共性のハーバーマスのリベラルモデルをあらためて問い直す必要性を感じ、その再吟味を通じて親密圏の変容を考察することを目指した。具体的には、18世紀前後の西洋に登場したとされる公共性のリベラルな理解を、いくつかの方向から再検討する連続講演会を企画した。①公共性とナショナリティの関係（施光恒）、②公共的メディアとしての大学（吉見俊哉）、③カントにおける公と私（加藤泰史）。以上の成果をまとめ（冊子として刊行）、西洋近代社会の公共性の再解釈から、公共圏と親密圏が流動化し再構造化される再帰的近代をあらためて照射し直すことが、残された課題の一つである。なお、(III)の政策的含意については、ギデنزが典型的に論じているように、欧米先進諸国の家族政策（公共政策）が親密圏の変容を前提しさらにエンパワーする形で展開されるのに対し、統計にも示される日本の近代家族のある種の頑強さは、家族政策の規定要因となっているとする構造化仮説が浮上したものの、本格的な検討は今後の課題としたい。

ワーキングペーパーは、上記成果を踏まえた上で研究業績①の内容の概要を示す「親密圏の戦後史」を序章に置き、後期近代（再帰的近代）における親密圏のあり様を分析する二つの論文（少女マンガの内容分析と、仕事意識や労働環境と親密圏の変動との連関の分析）、理論的検討で焦点となった近代的親密圏の公的領域との関係性（リベラルモデルも再帰的近代化論も「幸福な関係」を想定する）をめぐって近代家族の私秘性・公私の分離・凝集的閉鎖性などの特徴を思想的に検討した論文の計4本を掲載した。

**【通信欄】** 上記(II)に関して、吉見俊哉先生、施光恒先生、加藤泰史先生に加えて、理論班定例研究会でご講演なさった前川真行先生の四つのご講演内容を、テープ起こしをさらに加筆修正をお願いして冊子としてまとめる予定です。これらの連続公演は、事前に長文の企画趣旨を執筆し（ファイル添付）それを各講演者に読んでいただいた上で行ったものなので、一貫した内容になっています。今後GCOEで公共圏を理論的・歴史的に考察する際の参照点の一つとなればと考えています。たとえば本ユニットのワーキングペーパーを分冊化して刊行する等といったことは可能でしょうか。ご検討いただければ幸いです。

(研究代表者記入)

プロジェクト	<input type="checkbox"/> 次世代	<input checked="" type="checkbox"/> 次世代ユニット	<input type="checkbox"/> 男女共同参画に資する調査研究
経費	予算額	500 (千円)	実績額 490,800 円

様式 2

最終成果報告書（ワーキングペーパー）のホームページ公開に関する許諾書

研究成果タイトル

---

グローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」に提出する上記の最終研究成果報告書（ワーキングペーパー）の PDF ファイルを同プログラムのホームページに公開することについて、下記のように返答します。

2011 年 月 日

最終研究成果報告書（ワーキングペーパー）

の執筆者全員のお名前（自署捺印）

記

- 許諾する。
- 部分的に許諾する。  
許諾する部分を具体的にご記入ください。
- 下記の理由により許諾しない。
  - 調査対象者の個人情報保護のため
  - その他（具体的に理由をご記入ください）